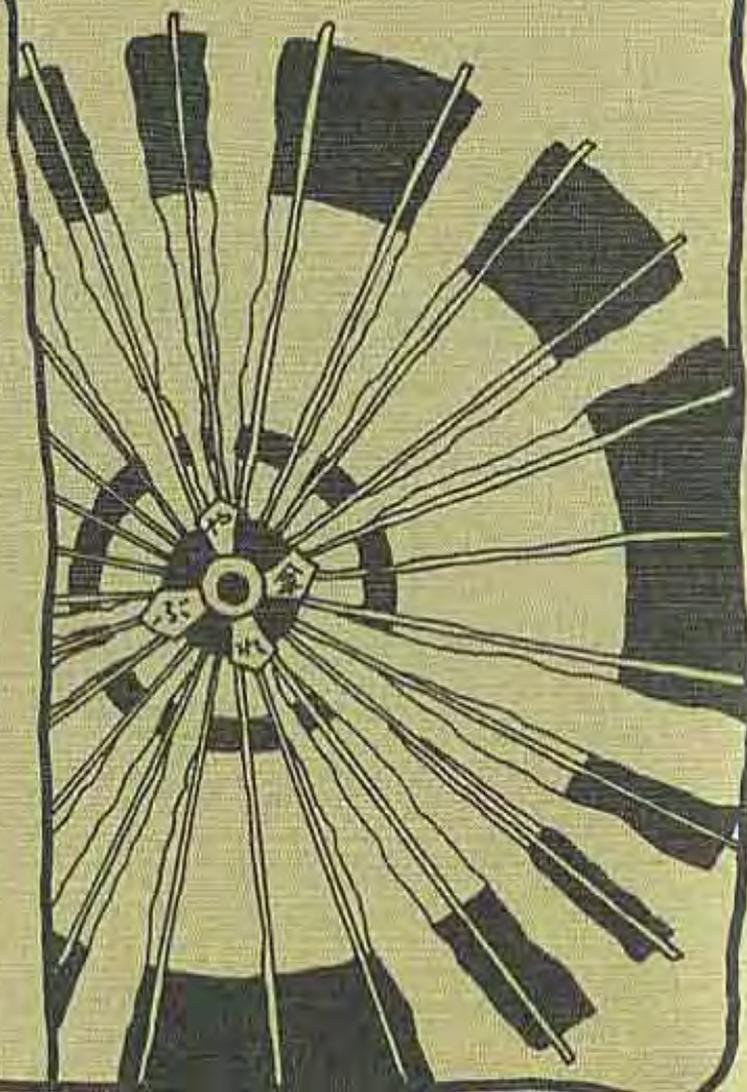


やぶれ傘



九十二号

一〇二六年十月

數珠玉に出水の泥の乾きみる	根橋宏次
茵身流れ二百十日の目玉焼き	きくちきみえ
野分後の砂利の溜りを踏みにけり	大島英昭
五位鷲の音が無月の空をゆく	藤井美晴
戦中の話や雲の静遠く	廣瀬雅男
午後の風立つて帯木揺らしけり	丑久保 敷
やはらかき雨も三日や証印	青谷小枝
礫への鉄梯子降り月見草	瀬島酒望
初秋の川原の空のちぎれ雲	白石正朝
この畑の向かうは田んぼ草雲重	飯道孝彦
秋の夜に指輪の石の転げ落つ	小山陽子
ははきぎの影にかくれて子等のかけ	朝池洋子
夕風のすすき夕日のすすき道	安藤久美子
雷鳴の中才カリナの音の流れ	久世孝雄
里は夏飛込み岩の今もなほ	秋山信行

抄 集 句 傘 れ ぶ や
大 崎 紀 夫 選

數珠玉や流れは堰を越えて落ち	天野美登里
もたもたと蠮螋の走る真つ昼間	有賀昌子
公園の猿も片陰離れざる	松村光典
落木の二本ほどを境とし	松本正生
葉の陰に西瓜の鱗の見えてをり	村田 武
冷房をかけて登をころころす	伊藤更正
木犀の香のある駅に列車待つ	小池一司
待合の皮の長椅子冷ややかに	大野芳久
幕間のロビーにぎやか秋拾	奥田麗子
しやきしやきと損限かる音昼寝さめ	黒木東吾
白粉花に触れて路地へと曲がりけり	小善若菜
ギヤロップして夏野へ入る仔牛かな	時田義勝
夏蝶や水かけろふの弁財天	貫井照子
雲海に浮かぶ孤島や植穂高	野口希代志
ヘリコプター二百十日を低く飛び	橋本美代

秋の夜

小山陽子

少しだけ高きチョコ買ふ秋はじめ
糸くづのやうな血管秋灯
秋の夜に指輪の石の転げ落つ
全身で息をする犬秋暑し
長き夜やくるくる回るティーバッグ
秋分や兄が木魚を叩く音
秋雲の下を鴉の四羽ほど
こほろぎの今宵は鳴かぬ曲がり角
昼時の窓辺の朴の末枯れて
秋灯口内炎を確かめる

ははきぎ

菊池洋子

夏の雲ダム放水の水けむり
天の川島に荒れたる弾薬庫
海の色一挙にかへて大夕立
ははきぎの影にかくれて子等のかげ
草むらに紛れてゐたりいぼむしり
爽やかや一刀彫の鳥ならぶ
山間の朝市で売る干し鰯
飼ひ猫の二百十日の大あくび
歩きだすまで忘れぬし今日の月
ひぐらしや陽明門のねむり猫

すすき

安藤久美子

向日葵の花道進みゆく帽子
炎昼の子規球場の砂煙
今朝秋の鍵の紛失事件かな
秋めける浜にざらざら虚貝
猫車来るあたりまで花茗荷
秋日和グラウンドピアノ傷だらけ
行き帰り道を違へて花野風
稲びかり眼鏡の螺子を締めなほす
ネクタイへ飛んで酸橘の搾り汁
夕風のすすき夕日のすすき道

晩夏

久世孝雄

子供神輿拍手の中へ戻りけり
笑ひつつビール泡を拭ひけり
雷鳴の中オカリナの音の流れ
和菓子屋の店先飾る風知草
審判の手のぐるぐると雲の峰
外つ国へ転勤の子と冷酒酌む
起き抜けの熱きコーヒー今朝の秋
年毎に記憶の新たな敗戦忌
背伸びびして夜空を仰ぐ夏の果
病む犬のこゑ絶え絶えと晩夏かな

猫

秋山信行

登校児の籠に揺れゐる兜虫
里は夏飛込み岩の今もなほ
コンビニに握り飯買ふ山女釣
熱き夜の路上に猫の腹這ひて
夏帽をどつて風まつ峠茶屋
自転車に水載せてゆく夏の畑
干物屋の葎簀の内に猫のこゑ
めまとひを払ひつつ畑仕舞ひけり
切岸の瀬の陰ゆく秋の蝶
初秋や東で売らるる文庫本

数珠玉

天野美登里

擦れ違ふ電車の向う秋の雲
雨樋を伝ふ貧乏かづらかな
浅漬の胡瓜をうすく薄く切る
めはじきや花壇の端にレンガ積む
おにぎりとチヨコを小昼に曼珠沙華
午後よりのダムの放水蘆の花
回送の電車に釣瓶落しかな
立ち止まり僧に会釈を新胡桃
数珠玉や流れは堰を越えて落ち
焼味噌の火箸は灰につきさして

蜥
蜴

有賀昌子

和紙うすく千切るちぎり絵秋の雲
地蔵菩薩の上でみんな鳴いてをり
すつぴんで過ごすひと日や羽抜け鳥
もたもたと蜥蜴の走る真つ昼間
佃祭風に幟の影くづれ
子供祭りカレーのほひどこからか
伸びをしてばかりゐる猫日日草
宿坊の庫裏より茸飯の香が
金色の鴟尾ある寺の白木槿
車庫入れのタイヤの軋み夕月夜

敗戦日

松村光典

さるすべりの花揺らしゐる並木道
声あげて子ら走りゆく日の盛り
公園に自転車こげば草いきれ
犬あへぐ炎昼を子は走りゆく
原爆忌ルノワール展を観に行く日
公園の猿も片陰離れざる
敗戦日赤とんぼうの現はるる
落ち蟬を拾ひ集める親子かな
満月を置いて台風一過かな
青空に白雲の湧く残暑かな

夏草や宅地開発待つ荒地
 駅前広場送迎バスへ夏帽子
 柿の木の花辺よぎる夏燕
 滝の音森林浴をしてゆけば
 炎天下赤信号の長きこと
 遠花火川原の道の闇ふかく
 秋蝶の羽一根たたみぬる草の先

増田みな子

境内にまこと小さき青田あり
 銀行の並ぶ通りに銚の列
 神官の浅葱の袴夏祓
 帰り来てまづ夜濯す旅衣
 雲の峰出発ゲートのガラス越し
 この町に小さき八坂社樽神輿
 蕎麦を食ふ地酒の冷やを酌みてより

松本善一

灸花小流れに犬足漬けて
かはらけを投げて茂りの谷深し
箒木の三本ほどを境とし
虫の闇途切れてふひに大通り
早稲の香や列車の窓の灯一列
校庭の芭蕉にボールどすと落ち
なめろうにせむと鱚に出刃二本

松本正生

器とは別の白さの冷奴
ハンカチの四隅を合はせ恙なし
夕立のあとに残りし水たまり
二つ三つ食べ葡萄の甘さ言ふ
吾が庭をよくぞ住処に虫鳴けり
蜻蛉のまた来たて壊す水鏡
また元に戻る話や花茗荷

武藤節子